

ボーマルシェの『フィガロの結婚』

大阪府立大学名誉教授 村田京子

モーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』の原作は、フランスの劇作家ボーマルシェ(本名ピエール=オーギュスタン・カロン)の『てんやわんやの一日あるいはフィガロの結婚*』で、1784年にコメディイ・フランセーズで初演されるや、大成功を収めた。原作を読んだモーツァルトがダ・ポンテに台本を依頼し、オペラとして1786年にウィーンで初演された。それ以降、モーツァルトのオペラは世界中で人気の演目となったが、原作はあまり知られていない。ここでは、ボーマルシェについて簡単に紹介した後、原作とオペラの内容の違いに焦点を当ててみたい。

ボーマルシェは時計工を父に持つ庶民の出で、彼自身も王室御用時計工になり、その後、国王秘書官となって国王の密使として活躍した。アメリカ独立戦争で、独立派への資金援助をルイ16世に促したのも彼である。一方で、社会的正義のために身分の高い貴族との法廷闘争を繰り返し、牢獄に入れられることもあった。

『フィガロの結婚』は1775年に初演された『セビーリヤの理髪師』の続編で、1778年には原稿が仕上がっていたが、正式に上演されるには6年の歳月が必要であった。戯曲は1781年にコメディイ・フランセーズに受理され、検閲官も好意的であったが、ルイ16世がフィガロのセリフにある牢獄批判に激怒して上演禁止を命じた。ボーマルシェはそれにもめげず、社交界で朗読会を何度も開き、貴族たちの賛同を得て1783年に王室娯楽劇場で上演されることになる。開幕直前に王令によって上演禁止となるが、この芝居を評価する貴族たちの反発を招き、ルイ16世は貴族の館での上演を許可せざるを得なくなる。最終的に、6人の検閲を経て1784年にコメディイ・フランセーズでの初演が実現された。

最後まで上演を渋っていたルイ16世を動かしたのは、取り巻きの貴族たちの声で、いわば世論の力であった。『フィガロの結婚』でも、初夜権の復活を企むアルマヴィエヴァ伯爵を阻止するためにフィガロが用いたのが、領地の農民たちに初夜権を廃止した伯爵への感謝の言葉を唱えさせるという、世論に頼る手法であった。このように、庶民の出で機知に富むフィガロは作者自身と重なり、主人公は作者の分身と見なされている。

次に、原作とオペラの違いを二点に絞って見ていきたい。まず、シュザンヌと伯爵との密会の約束を知ったフィガロの反応に違いがある。オペラでは、彼女の裏切りを非難し、女は魔物だと嘆くことに終始しているが、原作では、伯爵への非難に重きが置かれて



『フィガロの結婚』初演時の舞台:左からアルマヴィエヴァ伯爵(モレ)、シュジュバン(オリヴィエ嬢)、シュザンヌ(コンタ嬢) 出典:フランス国立図書館



フィガロ役のモンローズの衣装(1815) 出典:フランス国立図書館

あんた[伯爵]は自分が大貴族だから、生まれつきの才能もたっぷりあると思ってる! 爵位、財産、地位、いくつもの肩書き、全部揃ってはいばりくさってるんだ! でも、これだけのおいしい結果を手に入れるのに、あんたはいったい何をしたんです? 生まれるという骨を折っただけ、後は何もしてないじゃないか。

このセリフには身分制度に対する鋭い批判が見出せ、1789年にフランス革命を引き起こす民衆の心情が反映されている。ボーマルシェの芝居が公序良俗に反するとして上演禁止となったウィーンでオペラを上演するには、ダ・ポンテはこうした危険思想を省く必要があったのであろう。

二点目として、女性描写の違いがある。マルスリーヌがフィガロの実の母親だとわかった時、オペラでは父親のバルトロも「愛する息子よ」と叫んで彼を抱擁している。一方、原作ではバルトロはマルスリーヌを「身持ちの悪い女」と呼び、彼女との結婚を拒否している。それに対する彼女の反論は次のようなものだ。

恩知らずよりもっとひどい男の人たち、あなた方の情欲のおもちゃにされた犠牲者を、軽蔑して非難する人たち! 若い娘たちの過ちについてはあなた方こそ罰を受けるべきなのです。あなた方男性や判事の方々、私たち女性を裁く権利があるとうぬぼれている人たちは、罪深い怠慢から、女性たちが生きてゆくための誠実な方法を奪い去っているのですわ。

彼女はさらに、上流階級においても女性は隷属状態におかれ、「財産については未成年扱い、過ちについては一人前に扱われる」と男性優位の社会を告発している。ボーマルシェは民衆や女性という社会的弱者の立場に立って、当時の社会を痛烈に批判していた。

「狂乱の一日」は、放蕩者の伯爵に対して夫人が赦しを与える場面で終わるが、今後、伯爵が忠実な夫になるかは不確かだ。芝居最後の夫人のメランコリックな歌がそれを証明している。ピエール=ラルトマが指摘しているように、オペラにおいても伯爵夫人の赦しの場面はメランコリックな音調となっていて、モーツァルトが原作を深く理解していたことがわかる。したがって『フィガロの結婚』は単なるどたばた喜劇ではなく、深い意味合いを帯びていて、それが現在においても人々の心を打つ由縁であろう。

*ボーマルシェの『フィガロの結婚』からの引用は鈴木康司訳(大修館書店)を用い、ボーマルシェに関しては鈴木康司『闘うフィガローボーマルシェ一代記』(大修館書店)、Pierre Larthomas, Notice du *Mariage de Figaro*, Pléiadeを参照した。